

# H<sup>OSTELLING</sup> Magazine



のんびり空を  
見上げられる時間って、  
実はかけがえのないもの。

俳優 満島 真之介



Hostelling Magazine × 地球の歩き方 www.arukikata.co.jp

地球の鼓動を感じる世界初の国立公園

## イエローストーン国立公園 (アメリカ)

◎◎トリップアドバイザー  
眺めのよいドライブコース

**viator**  
国立公園ツアー特集

Youth Hostel Pick up

古の文化を育んできた大自然と  
日本の原風景に思わず佇む、遠野。  
遠野ユースホステル

この冊子は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。





www.yamazakipan.co.jp

おいしいから、  
いつでも一緒。



# ランチパック

公式webサイト

ランチパック 検索

公式Facebookページ

www.facebook.com/lunchpack.jp



スマートフォン用アプリ **ランチパックCLUB** 検索  
[Google Play] [App Store] からダウンロード



誰もがその場所から  
飛び立てるのを信じてた



『海炭市叙景』、『そのみにて光輝く』に続く孤高の作家・佐藤泰志原作、函館三部作がついに最終章  
美しく壊れかけた男と女の物語

オダギリジョー 蒼井優 松田翔太

北村有起哉 満島真之介 松澤匠 鈴木常吉 優香

監督：山下敦弘『マイ・バック・ページ』『味園ユニバース』

原作：佐藤泰志「オーバー・フェンス」（小学館刊「黄金の服」所収）

脚本：高田 亮 音楽：田中拓人

製作：永田 守 製作統括：小玉滋彦 余田光隆 エグゼクティブプロデューサー：麻生英輔 企画：菅原和博 プロデューサー：星野秀樹  
アンシエイトプロデューサー：吉岡宏城 佐治幸宏 米窪信弥 キャスティングディレクター：元川益樹 ラインプロデューサー：野村邦彦  
撮影：近藤龍人 照明：藤井 勇 録音：吉田憲義 美術：井上心平 編集：今井大介 制作プロダクション：ツインズジャパン  
製作：TCエンタテインメント、TBSサービス、アイリス、東京テアトル、蔵本金属、TBSラジオ、ひかりTV、ツインズジャパン、ギークビジュアルズ  
東京テアトル70周年記念作品 配給・宣伝：東京テアトル 北海道配給：函館シネマアイリス 特別協賛：北海道新聞社 助成：文化庁文化芸術振興費補助金  
2016年/日本/カラー/ヨーロッパビスタ/DCP5.1ch/112分 ©2016「オーバー・フェンス」製作委員会

overfence-movie.jp

9月17日(土)  
テアトル新宿 他  
全国公開



# Vision

Principle and Philosophy

## *Inclusivity*

世界を超えて

## *Learning and Understanding*

考えよう

## *Sustainability*

僕らと子ども達の未来のことを

日本ユースホステル協会はユースホステルのビジョンに基づき、日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

※本紙の情報は2016年9月20日現在のものです。変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。  
 発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会  
 編集・発行人 水野 幸  
 TEL.(03)5738-0546  
 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1  
 国立オリンピック記念青少年総合センター内  
 ※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。  
 制作・印刷製本/サンメッセ株式会社

## Line up

インタビュー ..... P02  
 俳優/満島 真之介氏  
 のんびり空を見上げられる時間って、  
 実はかけがえのないもの。

Youth Hostel Pick up ..... P08  
 古の文化を育んできた大自然と  
 日本の原風景に思わず佇む、遠野。  
 遠野ユースホステル

Hostelling Magazine × 地球の歩き方... P12  
 地球の鼓動を感じる  
 世界初の国立公園  
 イエローストーン国立公園(アメリカ)  
 ■園内で楽しめるアウトドアアクティビティ  
 ■国立公園で暮らすワイルドアニマル

トリップアドバイザー & Viator ..... P18  
 耳寄り! 観光NAVI  
 眺めのよいドライブコース  
 国立公園ツアー特集

gtg ..... P20

教えて! 旅GIRL ..... P21

Event Information ..... P22

のんびり空を見上げられる時間って、  
実はかけがえのないもの。

俳優 満島 真之介



ドラマや映画、CMへの出演だけでなく、ドキュメンタリー番組のナビゲーターや、人気アニメの主演声優を務めるなど、活躍の幅を広げ続けている注目の若手俳優、満島真之介さん。

満島さんのモットーは、「常に全力投球」。

だから、友人から名付けられた愛称は「マックス」。

明るく親しみやすいキャラクターから、

最近はバラエティ番組で活躍を目にすることも多い。

そんな満島さんが、「日本一周自転車旅」の経験者だということをご存じだろうか。

満島さんにとって、「旅」とはどんな存在なのだろうか。

そして、インタビューの中で垣間見えた、意外な「素顔」とは。

ロケ地でのエピソードを交えて、語っていただきました。

生まれ育った「ふるさと」の魅力は、  
外に出てみなければ気づけない。

**Q. 青い海、豊かな自然、おいしい食べ物……。**

満島さんのご出身である沖縄といえば、日本屈指の  
旅スポットですよね。そんな魅力的な場所で、  
どんな子ども時代を過ごされていたのでしょうか？

「ざわわ……ざわわ……」とサトウキビ畑が一面に生い  
茂っているようなところを毎日走って、学校に通っていま  
した。雨が降ったって、全くおかまいなし。沖縄で暮らして  
いる小学生の男の子たちって、基本的に「傘を差す」という概  
念が無いんですよ(笑)。傘なんて持っていたら両手を使っ  
て遊べないし、ハブが出てきたら襲われちゃうかもしれない  
し……。「自然と共に生きている」という言葉がぴったりの  
日々でした。海や緑に囲まれていて、水が豊富。それは、  
人間が生きていくためには一番良いことだなと今でも思っ  
ています。

**Q. うらやましい(笑)! そんな沖縄は、満島さんにとって  
どんな「場所」ですか？**

世界中どこに行っても、どこの国の人にも会っても、誇り  
を持てる場所が「沖縄」です。そんな「ふるさと」が自分には  
あるんだということ、本当に嬉しく思っています。沖縄  
は、日本の中でも異質な存在。本州から離れている島だか  
ら、場所によっては移動距離が海外に行くのと変わらない  
。それに、元々は「琉球王国」という国だったから、文化  
も違う。だから、ひとつの国としてとらえている部分もある  
し、日本の都道府県の一部になってから、もっと良くなっ  
ていった部分も、たくさんあるでしょうね。そういった歴史  
や文化に近い場所にいたので、「ふるさと」という存在の  
大きさを感じさせられることは多いです。

**Q. 沖縄でずっと暮らしていきたいと思っていましたか？  
それとも、上京したいという想いがあったのでしょうか？**

沖縄にいた頃は、あまりそういうことを考えながら過ごした  
ことはなかったかな。外の人から見える沖縄と、沖縄で生ま  
れ育った人にとっての沖縄って、ちょっと違うんだろう  
な……というのはずっと思っていました。雪国に育った人  
にとっては、雪が積もるのは当たり前で。でも、僕らからす  
ると、雪国の人がどういう風に暮らしているのかは、「イ  
メージ」の中にしかないんです。だから、外に出てどうい  
う生活がしたいかな……というのは、あくまでも自分の想  
像でしかなくて。

「やっぱり沖縄って素敵なところなんだな」って思うことが  
できたのは、僕自身も大人になって、外に出てから。色んな  
場所があるんだな、というのも、外に出なければ感じられ  
ないこと。色んな場所へ足を運ぶ意味は、そこにあると思っ  
ています。

まっすぐな道が続く、北海道のオロロンラインです。  
道中で出会った方と一緒に走ることにになり、その方に  
撮ってもらいました。懐かしい!

「暇」こそが、人間にとって  
一番の幸せだと思う。

**Q. 俳優としてデビューされる前に「日本一周自転車旅」に  
挑戦されたそうですね。この旅での経験は、  
大きなターニングポイントでしたか？**

「旅に出た」ということよりも、「旅に出たい」という衝動そ  
のものが、大きなターニングポイントだったんだと思いま  
す。旅したことに対しては、実はあまり重要視していない  
です。「外の世界を自分の目で見たい」と思った、当時の自  
分自身の心に、「いいね!」って言ってあげたいな。行き先  
は、日本一周だろうが、世界一周だろうが、それこそ隣町だ  
ろうが、どこだって良い。距離の遠さや移動に掛かる時間  
は、旅で得られるものの大きさは、ほとんど関係ないと思  
うんです。「旅に出たい」という衝動がボンと生まれた瞬間  
に、一歩踏み出せるか踏み出せないか。それが一番大切な  
んじゃないかな。そこからすべてが変わっていく気がする  
んですよ。

**Q. 満島さんの心に「旅に出たい」という衝動が  
湧き起こった当時は、どんな心境でしたか？**

単純に、自分の足で物を見たかったんだと思うんです。今、  
世の中が「データ社会」と呼ばれる時代になってきて、色  
んな情報がひとつの画面の中で世界中どこでも見られるじ  
ゃないですか。それってとても良いことだと思うし、色々なこ  
とを感じられるツールのひとつでもあると思っています。で  
も、その一方で、「体感する」というのも、自分自身にとっ  
ては大きな宝になるだろうな、と。体内の細胞に流れる「喜  
び」であったり、「恐怖」であったり……あらゆる「刺激」と  
いうものが、僕は好きだし、それがなくて生きていけないん  
です。例えば、外からみるとただの沼なのに、入った瞬間に“グ  
〜”と身体が沈んでいくこの体感というか、そこに立たな  
いとわからない感覚。自分の足で立って、生活してみないと、  
得られないものがあると思うんです。

7ヶ月かけて自転車旅をしたときのことを振り返ると、「あの  
ときはなんて暇だったんだろうな」なんて思います(笑)。で  
も、“暇こそが人間にとって一番の幸せ”だと僕はいつも思っ  
ていて。特に、僕らの世代なんていうのは、ずっとせわしな  
いんですよ。何かに追われて、常に誰かと連絡を取り合っ  
たりして。のんびり空を見上げている時間って、一体どれだけ  
あるんだろうなあ……。



## “旅に出る”のに、 目的なんて必要ない。

**Q. 自転車旅をするときに、何か旅の「目的」のようなものは決めていたのでしょうか？**

目的が無いのが「旅」なんです。衝動に任せて進んだ先に、「道」ができる。その時間が、僕にとっては一番大切かもしれません。みんな多分、旅をすることに対して、「目的」を考え過ぎている気がする。そんなに重く考えなくても良いと思うんだよなあ。

**Q. わかります！ 旅をするとき、「限られた時間を無駄にたくない！」と思って、朝から晩までの予定を細かく組み立ててしまいます……。**

それは、きっと「旅行」なんです。僕にとって、「旅行」と「旅」の違いがそれ。「旅」っていうのは、母親から生まれた瞬間から死ぬまでの人生のすべてのことを指す言葉だと思っています。進んだ先に、たくさん理由が出てくるんですよ。旅の後に、「ああ、僕は旅を通じて全国の子どもたちに出会いたかったんだな」とか、「度胸試しをしてみたかったんだな」とか。だから、10代～20代のお子さんがある親御さんには、「自由にさせた方がいい」ということを伝えたいです。海外に



鳥取県の白兔海岸に旗が立っていて、セルフタイマーで撮影した写真です。これはテイク4。ジャンプに失敗して撮り直したんです(笑)

留学させるべき、ということではなく、隣町に一人で行くのも良い。まだまだ知らない世界がいっぱいあるので、若い人たちにはそれを体感してほしいなと強く思います。

**Q. ちなみに、自転車旅をされているときは、どんなところに泊まっていたんですか？**

基本的には、公園や広場での野宿です。毎日16時頃には、辺りが暗くなる前にその日の宿泊先をどうするか決めていましたね。自転車旅において、寝る場所が確保できないときほど落ち着かないことはないんです。寝る場所さえ決まれば、疲れているのでグッスリ眠れる。それで、いつも夜明け頃に目が覚めて、やることがないので野宿した場所の周りを掃除して、公園にやってきたおじさんおばさんたちと一緒にラジオ体操をしてから出発する……というのが日課。だから全国の人とラジオ体操しましたよ(笑)。  
新潟に行ったときに、親切なおじさんが「安くても良い宿があるよ〜」って紹介してくれて、そこに泊めてもらったこともありました。そういえば、そのときに泊まったのはユースホテルだったなあ。実は、僕の両親がユースホテルのヘビーユーザーだったみたいで、子どもの頃から「旅をするならユースホテルを使いなさい」とって勧められていたんですよ(笑)。

## 自転車旅で得た一番の財産は、 「にのいの境界線」。

**Q. 自転車旅で印象に残っている出来事がありますか？**

飛行機が着陸して、空港に降り立ったときに、その土地独特の「にのい」ってありますよね。沖縄に降り立つと「沖縄だ〜！」ってにのいだったり、東南アジアではスパイスのにおいがしたりとか。あれ、実は日本の中にもいっぱいあるんですよ。それが、僕にとってはとても神秘的だったし、旅の醍醐味でした。

日本は世界の中でも、「境目」を知らない国だと思うんです。一応、「県境」はあるけれど、海を渡らなければ、どこに行っても日本なので。大陸であれば、絶対に国境はありますからね。でも、国境を誰が決めたかという、人間が決めただけ。海や大陸の位置というのは、人間には決められない場所。それを考えると、旅をして回っているときに感じた、僕の中での境界線は「にのい」だったんです。多分、車とか電車で旅をしている人には感じられない、自転車旅の良さだと思います。もしかしたら、歩いていても感じられないかもしれない。自転車で走っていると、急に変わるんですよ！海からの距離なのか、山からの距離なのか、地域によって色々な要因があると思うんですけど、突然「にのい」が変わる。自転車旅で体感できた一番の財産は、この「にのい」なんですよ。

**Q. 逆に、自転車旅で大変だったことやアクシデントなどはありましたか？**

数え切れないほどありますよ! 段差にタイヤがはまってしまったり、トラックに轢かれそうになって、周りの景色がスローモーションに見えるってこともあったし……。

あと、自転車旅の一番の敵は「雨」。雨が降っちゃうとどうしようもないんですよ…。特に、僕が旅をした年は、雨がとて多くて大変でした。たしか、山口県を走っていたときだったかな。土砂崩れが起きて、下道が通れなくなっちゃったことがあったんです。山の方だから人が誰も来なくて、完全に立ち往生して。土砂をどかさそうにも、そのための道具もない。「どうしよう……」と途方に暮れていたら、「あっちに見慣れない若いモンがいるぞ」「向こう側に行きたいらしいぞ」……って、地元のおじさんたちがゾロゾロ10人くらいきてくれて。土砂をどかして僕と自転車が通れるだけの道をつくってくれたんです。あのおじさんたちが助けてくれなかったら、あのときどうなっていたか……。

**Q. なんて壮絶な……悪天候やアクシデントで、旅を途中で辞めたいとは思われなかったのでしょうか……?**

何か「責任」とか「プレッシャー」を背負って旅をしているわけではなく、単なる自分の衝動で始めた旅だったんで、「辞めたい」という衝動が湧いていたら、きっと辞めていたと思います。でも、当時は期間も別に決められているわけでもなかったし、「行きたい」「前に進んでいたい」という衝動がずっとあったから、そうはならなかったですね。

**本州と北海道を結ぶ「函館」は、  
さまざまな感情が渦巻く街。**

**Q. 俳優業を始められて、今も「人生の旅」を続けていらっしゃる満島さん。日本一周の経験が活かされていると感じる瞬間はありますか? 自転車旅での経験は、現在の満島さんご自身にどんな影響を与えていますか?**

自転車旅の経験は、仕事においてというよりも、人生そのものにおいて良い影響がありました。日本のどこに行っても大体知っている場所だということには、本当に助けられています。今回出演している『オーバー・フェンス』という映画のロケ地の函館も、自転車旅のときに行ったことがあるんです。でも、昔自転車で行ったときと飛行機で降り立った今回とは、街の表情が全く違うんですよ。自分の状態の違いというものもあると思いますが、その再確認ができるっていうのが、日本を周って良かったなと改めて感じる時ですね。旅先で出会った方とは、たった数分会話をしただけでも、その後も関係性が続いていくんです。どこか行きたいなあと思った時に、「そういえばあそこにはあの人がいたな」って何年かぶりに連絡を取ると、おいしいごはんとか泊まる所とかを全力で手配してくれたり……こんなお付き合いができるのも、旅を通じて気づかせてもらったことのひとつです。



### Profile

## 満島 真之介

1989年5月30日生まれ、沖縄県出身。10年、舞台『おそろべき親たち』(熊林弘高演出)で俳優デビュー。13年『風俗行ったら人生変わったwww』(飯塚健監督)で初主演を果たす。映画・ドラマ・舞台など相次いで出演を果たし、16年4月からはJ-WAVE「AVALON」で毎週水曜日ナビゲーターを務めるなど、活動の幅を広げている。



スタイリスト: DAN  
ヘアメイク: 石川奈緒記

**Q. 今回のロケ地・函館はどんな場所でしたか？**

函館って、本州と北海道の「架け橋」な気がするんです。だから、人がすごく行き来する、色んな感情が渦巻いている町だと感じました。自転車旅のときに北海道全域を回った経験がありますが、中でも函館は、すごく強い「パワー」と、とても寂しい「孤独感」の両方を感じさせてくれる。それはきっと、色んな人が入り乱れていて、本州の人が持っている嫌な部分を持ってくる人がいれば、その逆もあって。だから、一言で表すのは難しい町ですね。方言も割と標準語に寄っていて。北海道にいるという感覚が、あるようで無い。道を歩いていると、家がぽつんぽつんと点在していて。この家と家との距離感が、函館を物語っているんじゃないかと。歩くにはちょっと遠い。でも、自転車だと近い。……という距離感が、人との距離感、本州との距離感かと。何だか不思議な町だなあ、と。だからこそ、色んな監督がこの函館という場所で映画を撮るのでしょね。

**背中に入っている「芯」を抜いたら、人は一体どうなるのかを考え続けた1ヶ月。**

**Q. 映画『オーバー・フェンス』で演じている「森」という役どころは、普段テレビで目にする満島さんとは対照的な人物像という印象です。共感できる部分はあるのでしょうか？**

たぶん、今回演じた森が、本来の僕の姿に近いです。もちろん、テレビに出ている時の自分も僕自身なんだけど、自分が一枚の「紙」だったら、どこを切り取ったのかというだけ。いつもは切り取らなくても良い部分を、この役を通じて切り取ったような感じ。自分としては、今まで出せなかった「寂しさ」、「孤独感」を、森という人間に吹き込んでいきました。

**Q. 役づくりにおいてこだわったポイントや、気を遣った点などはありましたか？**

「森がどういう佇まいでいるだろうか」ということに関しては、常に考えていました。人の前に立つときって、いつも背中に一本の「芯」を入れて、外へ出て行くと思っていて。その芯を外した時の自分ってどうなるんだろう……というのを常に意識していたし、自分に「生きる気力が無くなった瞬間」どういう状態になるんだろう、と考えていました。細胞一つひとつが入れ替わっていないというか、積極的に入れ替えようとしない状態ってどんな感じだろうなあ……と。いつもは無理矢理にでも入れ替えるのに、この函館での1ヶ月は、自分の中に感情を停滞させていきました。それはなかなか勇気のいることだったし、今考えるとすごくキツイことをやっていたなと思います。

でも、普段の生活で、気を張っている時よりもラクだったりもするんです。芯が入っていないので、どんな状態でもいられ

る。何をしようか、良いも悪いもない。いつもなら、自分が相手にどう見られているのか、この洋服はこの場には合わないだろうか、とか、TPOの制約がある中で生きている。それを全部取り払ったのが、今回の役どころです。起きているのか起きていないのか。寝ているのか寝ていないのか。生きたいのか、死にたいのか。誰かのために生きるって何なんだろうとか。そんな状態を、撮っていただけだと思います。

## 同じ光景なのに、見え方が違う。 まるで「空」のような映画。

### Q. 完成した作品を観たときは、どんな印象を持ちましたか？

例えるならば、「空」みたいな映画だと思いました。毎日あるものだし、どの国に行っても存在する、雲ばかりの日もあれば快晴の日もあるけど、同じ表情の日は一瞬もない。普遍的で変わらない景色の中で、どこかがいつも違っているという映画。だから、今日観て、明日観たら、全然違う世界が広がる映画なんじゃないかな。そこがとても新しいと感じました。

何かを得ようとして映画を観に行くことも多々ありますが、逆に、いつもある風景を見せられているような感覚に浸れるのが、この作品です。「誰にでもある世界」、それが函館という地域だったんじゃないかと。どこの国の人を観ようが、南国の人を観ようが、子どもを観ようが、おじいちゃんおばあちゃんが観ようが、同じ光景なんだけど、全員見え方が違う映画だと思います。公開したときにどんな反応があるのか、とても楽しみです。

### Q. 最後に、読者へメッセージをお願いします。

『オーバー・フェンス』は、いつも見ない空を延々と見るような映画です。でも、空を2時間見て過ごすという時間の方が、この時代にとってはとても奇跡的なことだと思う。先ほど旅の話をしたときにも少し触れたけれど、多分、一番空を見上げていない世代って、10代~20代なんじゃないかな。だからこそ、映画を通じて、自分の心の中に広がっている美しい部分や、嫌な部分を感じて、「自分はこういう人間なんだな」と受け止めてもらうきっかけになったら嬉しいです。

### 満島真之介さん出演映画

孤独、哀しみ、愛情、すべてを包み込む函館、  
遠い幻のような一瞬の夏  
フェンスの先にあるのは愛か、希望か――

家庭をかえりみなかった男・白岩は、妻に見限られ、東京から故郷の函館に戻っても実家には顔を出さず、職業訓練校に通いながら失業保険で暮らしていた。訓練校とアパートの往復、2本の缶ビールとコンビニ弁当の惰性的日々。なんの楽しみもなく、ただ働いて死ぬだけ。そう思っていた。ある日、同じ職業訓練校に通う仲間の代島にキャバクラに連れて行かれ、そこで鳥になりたいと願う風変わりな若いホステスと出会う――。名前は聡(さとし)。「名前で苦労したけど親のこと悪く言わないで、頭悪いだけだから」そんな風に話す、どこか危うさを持つ美しい聡に、白岩は急速に強く惹かれていくが……。



©2016「オーバー・フェンス」制作委員会

### 『オーバー・フェンス』

9月17日(土)、テアトル新宿ほか全国ロードショー

配給：東京テアトル+函館シネマアイリス(北海道地区)

監督：山下敦弘

出演：オダギリジョー 蒼井優 松田翔太 北村有起哉 満島真之介

松澤匠 鈴木常吉 優香

公式サイト：<http://overfence-movie.jp/>

## 「オーバー・フェンス」 直筆サイン入り非売品パンフレット

抽選で3名様にプレゼント!

ご応募は日本ユースホステル協会ホームページの  
専用お申込みフォームから! <http://www.jyh.or.jp/hm/>

■応募締切 2016年12月末日

※なお、当選発表は、商品の発送を以て替えさせていただきます。

サイン  
入り

